P

あると

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐ

【Ｎコード】
Ｎ５４８７Ｑ

【作者名】
あると

【あらすじ】
あるマンションの一室で、恋人たちが見知らぬ男に襲われた。
男は二人を拘束し、ある目的を持って腰を据えた。
警視庁ＳＩＴの隊員たちは水面下で動き出した。

第1話「縄」

シャワーからあがった田原真知は、携帯を手に取った。
メールが着信していた。彼氏から、もう少しで到着するという内容だった。
真知は髪の毛を包んでいたタオルを放り出し、別のタオルで包み込んだ。充分に水気を取ってからドライヤーを使う。髪を伸ばすようにしてからは、特に気をつけていることだった。ドライヤーを使う時間は短くしないと、痛みやすいのだ。
英二は長い髪が好きだった。付き合い始めてまだ一年だったが、髪もだいぶ伸びてきた。髪の長さの分だけ、二人の関係は深まったと言える。
化粧水を肌に染みこませてから、ストレッチを始めた。真知の悩みは、身体の固さだった。運動は好きな方ではないし、学生時代に部活をやったこともなかった。
風呂上がりのストレッチ運動は苦痛だった。それでも、彼氏のために日課にしていた。そのせいか、少しだけ体力もついてきた気がする。彼の求めにも、長く付き合えるようになっていた。
ひととおりストレッチを終え、髪を乾かしたところで、玄関のチャイムが鳴った。
真知はガウンを羽織り、足を早めた。
「はーい」
ドアスコープを覗くと、彼氏の帽子が目に入った。マンモスの絵柄が可愛いキャップだ。先週の誕生日に、真知がプレゼントしたものだった。
「ちょっと待ってね」
ドアのチェーンを外してから、鍵を開けた。見上げる形でキャップが目に飛び込んでくる。
「え」

彼の口には、透明テープが貼りついていた。
「やあ」
腰あたりから声がした。
「え」
突き飛ばされた。素早く覆い被さってくる人の姿が、非現実的なものようだった。彼のために緩めていたガウンがはだける。
ドアのところで、彼がくずおれた。マンモスのキャップが転がって脚にあたった。真知はようやく恐怖というものを感じはじめていた。

頬を叩かれた。
吉田英二は痛む頭を押さえようとして、手が動かないことを知った。
「起きたかい」
若い男の声だった。どこかで聞いたことのある。
目を開いた途端に、そんなことは吹き飛んでしまった。恋人が肌も露わな姿で、ぐったりと座り込んでいたのだ。
「真知！」
口にした恋人の名前は、耳に届かない。口にテープが貼りついていた。
起きあがろうとして、男の存在に気づいた。
「お前が！」
どうにかしたのか、と言おうにも言葉は出なかった。体ごとぶつかる。大学時代は柔道をやっていた。体格も大きい方だ。並の男など吹き飛ばす自信があった。
「待てよ」
動けなかった。肩を押さえられていた。しかも片手である。振り払おうとして気づいた。手が後ろ手に縛られていた。
思い切り力を込めても、縄が手首に食い込んだだけだった。
「痛いだろ？」
冷静になれ。英二は自分に言い聞かせた。柔道の試合と同じだ。がむしゃらに向かっていっては倒される。相手の隙を窺え。

「大人しくなったね」
笑い顔が憎らしい。男が手を放す。その瞬間を待っていた。
英二の身体は柔らかい。彼女相手の寝技にも応用が利いている。
腰を落として、腿を回転させる。膝から先を伸ばし、男の脚を刈り取った。
「！」
足首に痛みが走った。
「ごめん。そっちも縛っておいたから」
縄が両足に絡んでいた。
冷静になれていなかった。普通なら気がつきそうなものだ。悔しい。
「彼女が心配？」
英二はかみつきそうな勢いで這い進もうとする。だが、縄は前進を許してくれなかった。
「大丈夫だよ。ほんの少し、痛かったかもしれないけど、今はすごく気持ちよくなっているから」
男ははだけた真知の胸を手のひらに乗せた。
英二は言葉にならないうなり声を上げた。

第2話「唾液」

吉田英二の手首は赤かった。ナイロン製の縄を力任せに引っ張る。
「引きちぎるなんて無理だから」
男の軽い口調に苛立つ。無理と言われても諦めたくはない。皮膚がこすれてうっすらと血が滲んできた。
「頑張るね」
男は感心して英二の顔を見下ろした。英二はちらりとその横を見る。田原真知は全裸に近い格好で壁にもたれていた。目は開いている。だが、うつろな表情だった。意識が混濁しているのかもしれない。
「彼女に何をした！」
男は口元に手を当てて、黙るように促した。
「大きな声を出すなよ。ご近所迷惑だろ」
同年代の男から諭されるようなことを言われ、英二は怒りが収まらなかった。
「答えろ！」
「黙れよ」
男がすうっと近づいた。
蹴り。
そう思った瞬間、暗闇が落ちてきた。

英二が意識を取り戻したとき、血の臭いが充満していた。生暖かい水溜まりに、突っ伏していた。
痛い。
自分の口から溢れた血液と唾液が水溜まりの正体だった。混乱した。どうしてこうなっているのかわからなかった。
「起きたか」
髪の毛を撫でられていた。いつもなら、恋人の真知がする行為だ。
声の主は彼女ではなかった。

背筋が震えた。
男が覗き込んでいた。その目を見た。
笑っていた。
「大人しくしていろ」
得体の知れない人間だった。初めて見る顔だ。何故、男が彼女の部屋にいるのかわからない。
いや、違う。男を部屋に入れたのは、自分だ。
真知の部屋に向かう途中、この男に声をかけられた。振り向いた時、腹に重い何かを感じた。今も、みぞおちのあたりが痛んでいる。蹴りで、気絶させられたのだ。そして、自分を囮として、彼女の部屋に侵入した。
情けなかった。
学生時代はずっと柔道をやっていた。社会人になって数年、すっかり遠ざかっていた。肉体の緩みが、精神の緩みに繋がっていたのかもしれない。昔はどんなときでも緊張感を持っていた気がする。危険を回避する気構えのようなものが常にあった。それが失われていたのだと知った。
男は、大人しくなった英二に背を向け、リビングのほうに歩いていった。棚の上に置かれたピンク色の携帯を見つけた。迷わず開き、メールボタンを押す。慣れた手つきで、一通のメールを作成し、送信した。
英二は男の動きを目で追いつつも、何もできなかった。痛みが頭を麻痺させていた。顎の骨が折れているようだった。口の中から何本かの歯が血の海にこぼれていた。
「さてと」
英二は体を震わせた。男の目が自分を見ていた。
近づいてきた。
靴下を履いた足は音を立てない。普通に歩いているようで、無音だった。柔道の摺り足とはまったく違った。
「まだ少し時間がある。彼女と楽しみなよ」

男が真知の口に指を入れた。彼女はぼんやりとしたまま、指をしゃぶり始めた。すぐに、涎が垂れ始め、喘ぎが聞こえてきた。
「この女、相当淫乱だな。薬もいらなかったか」
淫靡な舌の動きが、英二を招くように躍った。

第3話「雑音」

マンションのドアに表札はなかった。
早見優悟は階段の下から観察した。
茶色のペンキはくすんでいる。ドアの端にはほこりが付着していた。隙間から漏れ出る空気が、変色したほこりを揺らしていた。こびりついているようにも見えた。掃除が行き届いていないようだ。
住人は家に帰って来ることが少ないのか、あるいは多忙なのか。これほど目立った汚れを、放置しておくことは考えにくかった。
早見は手が汚れていることに気づいた。砂粒と一緒に土を落とす。湿り気を帯びた土は、子供の運動靴からこぼれ落ちたものだろう。眉間に皺を寄せて、何かで拭えないか見回したが、自分の任務を思い出して諦めた。
コンクリートマイクを握った。彼の位置よりも下方に待機する警察官に手で合図を送り、単独で階段を上りきった。
靴底と廊下の面をゆっくりと密着させ、音を立てないように目的のドアに近づいた。
コンクリートマイクをドアに添える。煙草の箱よりもスリムな装置だ。そこから伸びるイヤホンを耳に当て目を閉じた。
危険なことだと思いはしても、音を聞くときの癖は直らなかった。目からの情報を遮断することで、聴覚を最大限に研ぎ澄ます。耳で見ているような気になる。

三人。

ドアを通した空気の振動が鼓膜を震わせた。規則正しくも、リズムの異なる呼吸音が判断の材料だ。
歩き回る人間が一人いる。フローリングの床の軋みから、体重は八十キロ程度の男と推定した。身長は百八十センチ前後。歩幅から脚

の長さを割り出しての逆算だ。
残りの二人のうち、一人は女性だ。時折聞こえるくぐもった咳の音階が、高音域に由来していた。猿轡（さるぐつわ）をされているようだが、性別は間違いない。マンションの管理人から聴取した情報で、この部屋の住人である二十三才の女だと判断した。
残りの一人はわからなかった。動きがないところを「見る」と、別の人質かもしれない。だが、歩き回る犯人の落ち着いた相棒という線も捨てきれなかった。
早見はそっとドアから離れた。警察官たちに下がれと合図する。自分も音を立てずに後退した。
男がドアに近づいてくる音を聞いた。外の様子を窺おうというのだろう。
ドアノブは回らず、向こう側の呼吸が激しく何度もぶつかっていた。見ている。静かな外界の変化を逃すまいと、注意を払っている。その音は早見の耳だけが捉えていた。
待機する下り階段は、ドアからは目で見えない位置だ。しかし、早見には「見る」ことができる。
コンクリートマイクを通路にあてた。
一人の警察官が早見を怪訝そうに見た。聞こえるはずがないと、その目が言っていた。数メートルの距離を置き、ドア越しでもない。空気の振動など伝わってくるはずがない。それが彼の常識だ。
早見は黙殺した。
そばだてる。まだ、遠い。
澄ます。あと、少し。
拾った。
ドアを震わせた音が、廊下を伝い、かすかな振動となっていた。
それを世界から盗み取る。

唾を飲み込む音。
荒い鼻息。

遠ざかる足音。

そこまでだった。
警察官の呼吸音がうるさい。緊張に耐えきれなかった男たちの雑音が邪魔をした。
加えて、早見自身の息も長くは続かなかった。聞くことに集中するとき、自分の呼吸は止めてしまう。
脳に空気が行き渡らなくなることで、酸素を求めた心臓の鼓動が強くなる。それもまた、雑音だった。
心臓を止めることができれば、もっと聞くことができる。
早見は真剣にそう思っていた。
音が遠ざかったことで、早見は一息ついた。汗が噴き出てきた。拭うと、手のひらの土の汚れが広がった。うんざりとした表情で、手を洗いたいと思った。
その前に、探り得た情報を急ごしらえの現地本部に伝えなくてはならなかった。

第４話「メール」

警視庁の通信指令センターに監禁容疑事案のメールが着信してから、一時間あまりが経過していた。
メールの返信で詳細を調査することも考えられたが、着信音が被疑者を刺激するおそれがあるため、控えられていた。
続報はいまだ、ない。
所轄の警察署である墨田警察署の警察官が現場に急行した。だが、隅田川に面したマンションの窓にカーテンは引かれており、中の様子を窺うことはできなかった。
通信指令本部長の判断によって、刑事部捜査第一課特殊犯捜査係には緊急の連絡をしていた。Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｉｎｖｅｓｔｉｇａｔｉｏｎ　Ｔｅａｍ――いわゆるＳＩＴである。

早見優悟は、墨田警察署の大会議室に設置された現地対策本部に入った。急ごしらえの部屋では、まだ机の配置を終えたばかりで、電話も準備している段階だった。
「早見」
小柄で色黒の男が携帯電話を口元から話して呼んだ。
「はい」
早見は上司にあたる麻生管理官のもとへ急いだ。今し方、現場で調査してきた内容をメモ書きして渡した。
麻生はメモを目で追い、携帯電話の相手に告げる。
「今判明した事項ですが、部屋の中には三人がいる模様です。男女の別は、男一、女一、あと一名はおそらくですが男です。生存しています。ええ、早見が確認しました」
麻生は、調査の継続と、人員を招集する旨を相手に伝え、携帯電話を閉じた。
「一課長だ」

早見は頷き、麻生の手招きに応じてパイプ椅子に腰を下ろした。
「休みのところ、すまなかったな」
「近場にいたので、急行できました」
早見は革ジャケットにジーンズという出で立ちの私服だった。外出先での呼び出しは日常茶飯事のことだ。もう、慣れた。
「管理官こそ、今日は久しぶりの休暇ではなかったですか」
先日、別の事件の捜査本部が解散したばかりだった。二ヶ月以上、休みはなかったはずだ。
「ああ」
麻生は皺の多い目尻を押さえ、音のない溜め息を吐いた。
疲れている。あと数年で退職する年齢だ。長い警察人生を送ってきた人間の重みのようなものが滲んでいた。
早見は同情しつつも、上司の存在が不可欠であることも知っていた。ベテラン捜査員は多くいても、特殊事案に対応できる警察官はそれほど多いわけではないのだ。指揮官となるとさらに少ない。
「制服ですが、マンションの直近からは下げられませんか」
制服を着た地域警察官は、このような現場ではあまり役に立たない。自分一人か、気心の知れた同僚でないと、万が一の時、足を引っ張るおそれがあった。
「そうしたいのだがな。ここの署長は同期でな」
墨田署長の強い希望もあって、署員を早見と同道させたのだ。
「しかし」
「皆を呼んだ。それまで、待て」
「わかりました」
ＳＩＴの仲間がくれば、署員は嫌が応にも外周に回るだろう。それならば、問題ない。
「管理官」
麻生の秘書役の伊集院が小声で口を寄せた。会話に入り込むタイミングを計っていたようだ。早見に軽く頭を下げ、二人に聞こえるように告げた。

「いま、一陣が本部を出たそうです」
「わかった」
早見と同じように招集された隊員が、第一陣として出発した。そのほかの隊員にも連絡は行き渡っている。
長引きそうだ。麻生は悪い予感にとらわれていた。
通信指令センターに届いたメールの内容を反芻する。

助けて殺され、４０３

メールアドレスから携帯電話の契約者は判明していた。住所は墨田区で、マンションの部屋は４０３号室だった。
あわてて打ったのがわかる。本文はなく、タイトル部分に書かれていた文字だった。
麻生は伊集院が差し出してくれた缶コーヒーを飲みながら、現地本部に顔を出した同期に手を挙げて挨拶した。

第5話「虜囚」

英二は玄関のドアから顔を離した。外の様子を窺うのは、三度目だった。
彼の顔は熱を帯びていた。男に蹴られた部分が痛かった。口の中にできた傷からは、血が流れていた。舌が嫌な味を知覚し続ける。
「今も、静か、だ」
うまく喋れなかった。何本かの歯がなくなっていた。下を見ると、廊下の赤い水溜まりに白い欠片が落ちていた。
「そうか」
男は携帯をいじりながら頷いた。下を向いたまま、英二に顔を向けていない。

今なら、殴り倒せる。

そう思わせる素振りだった。英二は足の裏に力を込めた。
いつの間にか、男が目をあげていた。
身体が動かなくなった。
見透かしたような視線が、英二の眉間に突き刺さった。ナイフをねじ込まれ続ける錯覚に陥る。頭蓋骨を割り、右脳と左脳の間をこじ開けられているような気がした。
視線が外れた。
ナイフが引かれ、傷口から脳漿が溢れ出てくる。そんな恐怖を覚えた。
足の拘束は、すでに解かれている。手首は後ろ手に縛られ、動かないが、油断していない今ならば、体当たりして寝技に持ち込めるかもしれない。
それでも、次の一歩が踏み出せなかった。
身体が脅えていた。

また、蹴られる。未来の光景が脳裏を過ぎり、動けなくなった。足を踏み出した瞬間、顔面が陥没する予想図がまざまざと浮かぶ。
「彼女と遊んでいろ」
男は、英二の葛藤を知らず、ぞんざいな扱いをした。
田原真知は発情した猫のように喘いでいた。
「英二」
彼女の両手も拘束されていた。英二と異なるのは、ドアノブに縛り付けられていることだった。
真知は全裸だった。むき出しの乳房の先が立っている。肌はうっすらと赤みを帯びており、英二が意識を取り戻してから、かれこれ一時間以上、同じような状態だった。
「また、ちょうだい」
恋人の姿に、英二は心の中で拒みつつも、男の部分は反応していた。ついさっき、彼女の身体の中に精を放ったばかりだというのに、再び力を取り戻していた。
「もうやめろ」
顔面の痛みよりも、彼女の振る舞いに痛みを覚えた。それとは別に、興奮を隠しきれない自分に嫌悪感を抱いた。
「きてよ」
悪魔の囁きだった。恋人のあられもない姿を、見知らぬ男がすぐ近くにいる。その男に恐怖と反感を感じながらも、逃げられない自分がいた。
英二は吸い寄せられるように、真知に近寄った。自分の血溜まりを踏みしめて、彼女の前に自分自身を差し出していた。ズボンの隙間からこぼれたものを、彼女は舌を出して含み入れた。
男は恋人たちの逢瀬の傍らで、二通目のメールを送信した。
刃物を持ってる。彼が怪我をした
携帯を置いてから、指を覆っていたパラフィルムを剥がした。指紋

の凹凸を消す極薄のコーティングだった。携帯にもドアノブにも、彼の指紋は残っていない。
最後のメールを送った。あとは待つだけだった。いずれ出てくるであろう警視庁ＳＩＴの精鋭を待つ。
それが彼の目的だった。

膝を震わしてしゃがみこんだ英二の下で、真知は体液にまみれていた。喉の奥にこびりついたものを咳き込みながら吐き出し、恋人に脚を絡め始めた。
英二は頭がおかしくなりそうだった。この異常な状態に、長くは耐えられそうもない。
涙が出てきた。逃げてしまいたかった。だが、真知を置いてはいけなかった。

第6話「苦悩」

二通目のメールで事態は急変した。
「怪我人？」
捜査第一課長の電話に、麻生管理官の声が高くなった。ＳＩＴの制服に着替えて来たばかりの早見と視線が絡み合う。
早見は愕然としていた。彼が聞いた荒い息づかいは、怪我をした被害者のものだった可能性が高くなった。被害者が自由に動き回れるはずはないという思い込みから、誤った判断をしていたようだ。それが直ちにどうにかなるというものではなかったが、彼の落ち度ではあった。
「もう一度、確かめさせてください！」
待てと言う麻生を振り切り、早見は現地対策本部の出口に向かった。
「よう、早見。なに、慌ててんだよ」
腹の出た中年が早見の行く手を遮った。白髪交じりの髪がきっちりと固められていた。
「係長。これから、もう一度、現場に行って参ります」
「行くのはいいけどよ」
がははと笑いながら、三笠係長は立ち塞がった。
「今更、何を調べるって言うんだ。そんな時間はねえんじゃねえかな」
軽く肩を叩いて、押し戻した。早見は虚を突かれてよろめいた。
「突入準備」
電話を終えた麻生は、鋭く言い放った。
周りにいた人間が駆け回り始めた。それぞれが電話の受話器を取り、無線機のマイクを口元に寄せた。
「マスコミにはまだ嗅ぎつけられていないな。報道規制の準備をしておけ」
麻生から強い気迫が感じられた。先ほどまでの疲れた様子は吹き飛

んでいた。警視庁本部と連絡を取っていた伊集院が頷いて、麻生の指示を伝達した。
「管理官。我々は現場へ向かいますよ」
三笠に頼むと言い、麻生は墨田署長とマンション付近の閉鎖について話をし始めた。
「おい、しゃんとしろ！」
三笠は、動揺から立ち直っていない早見の尻を叩いた。
「はい！」
早見は三笠の後を追った。
「突入準備だ。資機材車は先に行け」
『了解』
三笠は携帯無線機で、警察署の裏手で待機していた第一陣の隊員たちに指示を出した。
「シゲ」
『はい！』
無線機から短い返事があった。
「二陣を待てない。お前と早見は表から行くぞ」
『わかりました！』
シゲこと重森は三十近くだったが、ＳＩＴでは新人だった。今年、機動隊から引き抜いてきたばかりだった。三笠から見れば息子と同じような年齢だ。
総じて、ＳＩＴ隊員は年齢的にベテランが多い。重森や早見のような二十代は数人しかいなかった。
「早見」
今度は無線ではなく、後ろからついてくる早見に向けて言う。
「はい」
気合いを入れ直した早見は、目つきが変わっていた。任務から外されなかった。それは汚名返上のチャンスなのだ。
「どんな些細なことでも拾え。思い込むな。思い込んだら、人質は、死ぬ」

はっとした。
チャンスを与えられたなどと、意気込むどころではなかった。ミスをしたらどうなるか。人質と、犯人を取り違えたら、どうなる。救うはずの人間を捕らえ、拘束するはずの犯人を野放しにしてしまったら。
自分の耳が、人の運命を左右することにあらためて気づいた。手のひらがじっとりと汗ばんでいた。嫌な汗を拭うこともできず、早見は押し黙った。
悩め。
三笠は心の中で呟いた。
悩んでも死にはしない。
二人は口を閉ざしたまま、エレベータに乗った。

現地対策本部の入口には、誰が作ったのか、「墨田マンション立てこもり事件」と書かれた紙が貼られていた。

第7話「接近」

隅田川からの風がザイルを揺らした。
藤堂竜太は停止した。脚を壁に突っ張って、束の間休んだ。
風は数秒でやんだ。
ザイルを握り、再び降下を開始する。すぐ隣りで揺れる諸星巡査も、ほぼ同時に動き出していた。
二人のＳＩＴ隊員は壁面に取りついていた。目出し帽とヘルメットを被り、服は同じ紺の制服だった。銃のホルスターは腿に装着している。
目的の場所までは、残り二メートルほどだった。足にくくりつけた小袋から、ザイルが繰り出されている。万が一、部屋の中の人間が窓の外を見ても、ザイルが垂れていることを知られないための工夫だった。
ベランダの上まで来た。影が映り込まないように、ほんの少し上で待機する。幸いにして、日射しは逆方向だった。問題ない。
マンションの屋上で、支援の仲間が手を挙げた。指を三本立てている。藤堂は頷いた。
室内には三人の人間がいる。一人が犯人、二人が人質だ。
事案の認知から、すぐに呼び出しがあった。警視庁本部に登庁した同僚と合流し、立てこもり事件に対応する機材を積んだ車両で出発した。墨田警察署までは首都高を使って三十分程度だった。
唯一、現場に直行した早見が、先行して情報収集を行っていた。部屋の中の状況は、早見の耳が探った。移動中の車の中で、その情報を受け取った。人数と男女構成がわかっただけだが、十分な成果だった。
だが、数分前に会った早見の顔は悲壮なものだった。彼は言った。三人の位置を知らせる。だから、無線を聞いていてくれ、と。
あんな目をする早見は初めてだった。何があったのかはわからない。

『玄関から三メートルの壁際に女』

早見の声だ。

『怪我をした男がその近くに立っている。もう一人、被疑者は部屋の中央――女から二メートル奥。椅子に座っている』

そこまで、わかるものなのか。当てずっぽうで言っているのではないのか。

そう思わせるほど、細かい内容だった。だが、ここは早見を信じるしかない。

藤堂は相棒の諸星に頷くと、ザイルの小袋の口を緩く閉めた。一呼吸置いてから、身体を垂直方向に回転させた。頭が下になった。

ゆっくりとザイルを繰り出し、下降する。

ベランダの床が見えた。枯れた鉢植えがいくつかあった。身体が壁をこすり、モルタルが粉となって落ちていった。

『男が膝をついた。座った』

ベランダの上端に達した。慎重に覗き込む。カーテンが閉まっている。エアコンの室外機があった。その背面は壁だ。そこならば、降りられる。

藤堂は後ろ手に諸星に合図を出し、さらに下降した。壁という支えを失い、上半身が宙吊りになる。

顎を引いて、尻を落とした。下半身が壁を離れた。

身体を縮めた。腹のところのカラビナを軸にして、今度は水平方向に回転する。

下半身がベランダの領域に入る。膝を曲げて、足を落としていく。

腕が上がり、指先がベランダの上端に届いた。背中を反らして、室

外機と柵の間に降り立った。
カチリ
藤堂はザイルを外した。小袋も床に置く。
『被疑者、立った。そっちに行く』
まずい。
藤堂は身体を縮めた。ザイルを外してしまっている。すぐには戻れない。
この機に制圧するか。単独で近づいてくるのならば、窓を破り、銃口を突きつければ。
『窓から二メートル……』
近い。
ホルスターから銃を抜いた。安全装置を外す。
『止まった』
どうする。
体当たりで窓は破れない。まず、窓に一発撃つ。破る。カーテンが邪魔だ。その隙にこちらがやられる可能性もある。
そもそも、本当に犯人なのか。人質のひとりではないのか。早見の耳は正確なのか。
早見の目を思い出した。
気負いすぎている気がした。いつもの早見ではなかった。
信じるか、否か。
風がベランダの砂粒を巻き上げた。

第8話「突入」

銀色のＳＩＧ（シグ）　ＳＡＵＥＲ（ザウワー）　Ｐ２３０を握る藤堂は、引き金と指の間に隙間が少ないことに苛立った。
降下用の手袋は若干厚みがある。なかなかしっくりこない。できれば、素手で扱いたいところだった。だが、手袋を脱ぐ余裕はなかった。
窓の向こう側に、犯人はいるはずだ。歩みは止まっている。窓越しに約三メートルの距離を置いて、見えない対峙が続いた。
向こうは気づいていない。こちらが主導権を握っているということだ。この距離ならば、窓ガラスが間に入っていても、外れることはない。銃口を下に向けて数発撃てば、脚を打ち抜くことも可能だろう。
できはしない。
警告の発砲なしに、撃つことはできなかった。たとえそれが、凶悪な殺人犯でも、薬物中毒の異常者でもだ。こちらが一発撃っている間に、向こうは自由に行動できる。
藤堂は左手をシグを添え、動けないでいた。
落ち着け。
自分に言い聞かせる。
向こう側の人間が、犯人である保証はないのだ。カーテンの向こうは見えず、正体がわからない。
早見の耳が聞いた「音」しか、根拠がない。自分はまだ、見ていない。

『犯人は動かない』

囁き声だった。藤堂のイヤホンから漏れた音声が、犯人の耳に入ることを憂慮してのことだろう。

早見は、犯人と断定していた。藤堂はそれを信じたかった。しかし、絶対というものはない。犯人の顔を知らず、カーテン越しの向こうも見えない。この状況で行動するのは、危険な賭けだった。警察官が賭けを行うことは、ない。

『藤堂主任』

早見も、膠着した状況で、迷いを感じたようだ。行動を起こさない藤堂を責めるでもなく、ただ名を呼んだだけだった。

『――戻る』

部屋の中の空気が動いた。
早見は冷え切った地面から頬を浮かせた。
コンクリートの床に頭をこすりつけ、汚れたドアから、わずかに離れた位置で盗聴していた。髪の毛に綿埃が絡まった。
早見は必死に音を拾った。少しでも音が聞きやすい位置を探したら、ドアとドア枠の間の埃に気づいた。
空気の流れがあった。内と外の空気の行き来で、汚れが色濃かった。
早見は汚れが付くのも構わず、指先で慎重に埃をぬぐい取った。コンクリートマイクの先に装着した針を差し込んだ。隙間があれば、それが生きる。振動で音を拾うよりも、正確だったのだ。
部屋の中の動きが緩やかなものになった。
早見はそっと後退した。集中力の限界に来ていた。いったん、退く必要があった。
唇に髪の毛の塊が付着した。取らない。四つん這いで下がり、階段まで到達した。
それからはじめてゴミを取った。
早見をサポートする重森が息を潜めていた。彼は意外そうな顔で早見を眺めた。潔癖性と言ってもいい早見の顔が砂に汚れ、頬に擦り

傷ができていたからだ。
「早見さん」
制止された。今度はコンクリートマイクを地面に当てていた。
「また、椅子に座った」
無線機のマイクに向かって囁いた。
早見はいつもより集中していた。
訓練でも、早見と行動することが多い重森には、それがよくわかった。
「待て」
早見は目を見開いた。
「人質が動いた！　犯人に向かって走ったぞ！」

早見の無線と時を同じくして、藤堂も部屋の音に気づいた。
声を荒げた男。
足音。
そして、嫌な音が重なった。
藤堂は意を決して、ベストから小さな円筒を抜き取った。ピンを引き抜いた。閃光弾だ。
待機していた諸星へと合図を送った。諸星はそれを受けて、屋上に中継する。

『突入する！』

無線機が大声でわめいていた。
藤堂は左手に閃光弾を持ったまま、右手のシグの引き金を引いた。
銃弾が窓ガラスを破った。
蜘蛛の巣状になった窓を蹴り砕いた。
閃光弾を転がした。障害物がなければ、窓から二メートルの位置で止まる。つまり、犯人とおぼしき者の足下だ。
二秒。

一秒。
炸裂。
大音響と、激しい光がはじけた。
強烈な風がガラスの破片を撒き散らしていた。
藤堂は転がるように、部屋に躍り込んだ。

第9話「欲望」

少し前――
疲労を感じ始めた英二は膝をついた。真知が手を伸ばしてきた。心配しているようで、違った。彼女の目は、いまだに熱を帯びている。それに応える体力も、気力も薄れていた。
英二は腰を下ろすと、たまらなくなった。顔面の痛みがずきずきと襲ってきた。こんな状態の自分に、真知は求めてくる。
怒りが湧いた。恋人の身体の心配よりも、自分の欲望を満たすことを優先する女だとは思わなかった。だが、見捨てられない。いっそ、気を失ってしまいたかった。
真知は、英二の様子に失望したようだった。目が泳いで、もう一人の人間を探しあてた。
英二は真知の正気を疑った。彼女は、暴力的な男の肢体を眺めていた。
男は、椅子にもたれて、こちらを見ていた。真知の視線は受け止めていない。英二と真知の間の空間を、見るともなしに見ているだけだった。
男が椅子から立ち上がった。川に面したベランダに移動した。カーテンで陽光は遮られている。部屋の電気は点いていない。薄暗い室内では、男の顔かたちはよく見えなかった。
真知は男の姿を目で追っていた。英二のことは忘れ去ってしまったようだ。脚を組み直して、膝と膝の間を広げていた。
「真知」
愕然とした。
彼女は何をしている。何をしようとしている。
呼び声に反応して、彼女の顔が一瞬だけ振り向いた。
唇から、唾液が滴り落ちた。
やめろ。

彼女は、あの男を求めていた。

男は肌に忍び寄る視線を疎ましく思っていた。女の歪んだ感情は不快だった。

性欲を増大させる淫靡薬は必要なかった。そればかりか、邪魔だったようだ。男と女の関係がどのようなものか、ちょっとした好奇心から観察しようとしたが、まさか自分を巻き込んでくるとは思わなかったのだ。

遊びが過ぎた。だが、今更どうにもならない。耐えて放置するしかない。それに、間もなく目的が達せられるはずだった。

身体に鳥肌が浮かんでいた。ベランダのすぐ近くに、強い自我を持った意識が存在しているのがわかった。殺気にも似ている。押し潰し、制圧しようという気配だった。

彼は人の強い存在感を感じ取れた。子供の頃から、柔道や剣道、そのほかにもいくつか武術をやっていたからだろうか。いつしか、対峙する人間の気配を読むことができるようになっていた。やがて感知できる範囲が広くなったのは、父親に反発して、集団での喧嘩に手を染めたのが原因だったかもしれない。

外の様子をしばらく窺った。鋭い針を突きつけられている感覚がある。銃だろう。だが、撃てはしまい。予告のない射撃は、考えられない。

ぞくぞくする。

突入をしようとしている隊員と、玄関口で慎重に部屋の中を探っている隊員の存在は、彼の欲望を満たした。

これが警視庁のＳＩＴか。

聞き知っただけの内容よりも、遙かに想像を超えていた。三笠善則が酒の席で語った話は、誇張ではなかった。優秀な部下を持つ父親が誇らしかった。自分も、ＳＩＴ隊員になりたくなった。

三笠善嗣の顔に、はじめて笑いが浮かんだ。

「ねえ、君。こっちに来て」

甘ったるい真知の声に、三笠は吐き気を覚えた。高揚した気持ちがぶち壊しになった。
「やめろ！」
絶叫が英二に力を与えた。これ以上、真知の狂態を見たくなかった。どうしてこうなってしまった。答えは明らかだった。この男がいるからだ。
「やめてくれ！」
何も考えられなかった。柔道で鍛えた体が跳ね起き、突進した。腕は後ろに拘束されているため、体当たりしかできない。身を屈めて、肩から突き進んだ。
三笠は強い意志を感じ取った。大きな憎しみだった。単純で明快な感情は、勢いがあった。
ボコリ
だが、わかりやすい。三笠の踵が、英二の肩を破壊した。体当たりの威力を完全には殺しきれず、軸足が床を滑ったが、英二の身体は床に沈んでいた。彼は望みどおり、意識を失った。
銃声。ガラスの割れる音が重なった。
来た。
三笠の背中はヒリヒリしていた。危機的な状況が肌に粟を生じさせる。
リビングの床を蹴った。空中で耳をふさぎ、目を閉じた。身体全体をしならせ、猫のように受け身を取った。
直後、炸裂音と閃光が皮膚を撫でた。

第10話「Practice」

藤堂はカーテンを引きちぎり、部屋の中に侵入した。閃光弾の靄のために、視界が悪かった。
シグを慎重に構えて、すぐ横に移動した。侵入口が窓しかないのは、犯人にもわかっているはずだ。そのため、すぐに位置をずらす必要があった。
「動くな！」
藤堂は、先ほどまで犯人が座っていたと思しき位置に銃口を向けた。少し遅れて、諸星が降下してきた。銃を片手に窓枠を越えてくる。フローリングの床がうっすらと見え始めた。男が伏せていた。犯人か人質かは、今の段階ではわからない。残り二人の位置を特定するのが先決だった。
玄関の方向で咳き込む音がした。女だ。
その向こうで物音がした。ドアのノブを回す音だった。表の早見たちだろう。ドアは鍵がかかっているようだ。開けに行くには、リビングを横切らなければならない。だが、あと一人の行方が不明の状況で、大きく動くのは危険だった。
最後の一人が犯人だとしたら、どこかに潜んでいる可能性が高い。無闇に動くことはできない。もう少し靄が晴れれば、動きやすくなる。
「拘束しろ」
藤堂は、倒れた男をつま先で突いた。反応がない。まずは、この男を確保しようと考えた。被害者だったら申し訳ないが、今は一刻を争う。
諸星は頷いて、銃をしまった。手錠を取り出して、男の腕を探った。
「捕縄されているぞ。こいつは、人質だ」
「何？」
藤堂は全身を緊張させた。行方がわからないのは、犯人だった。

『後ろだ！』

早見の絶叫が鼓膜に響いた。無線を通しての音声は割れ、耳が痛んだ。

藤堂は、イヤホンコードを外して、横に転がった。早見の声とほぼ同じ時、彼の勘も危険を察知していた。

床が打ち鳴らされた。どこからともなく、人の姿が現れていた。

「動くな――」

シグの銃口が、つい先ほどまで自分がいた場所を狙った。両手が弾かれていた。銃口が天井を向く。先手を打たれたと認知したとき、腹に衝撃が来た。蹴りだ。

耐えた。

防護衣と筋肉の壁が、まともにくらうことを防いでいた。それでも、息が止まった。

上半身が前屈みになっていた。そして、頭が横に振られた。意識が吹き飛ぶ。ヘルメットが音を立てて転がった。

「てめえ！」

諸星が人影を見定めて殴りかかった。

男が消えた。

次の瞬間、諸星は宙を飛んでいた。低い位置からの蹴りが、彼の踏み込んだ足を払ったのだ。床に打ちつけられ、背中に激痛が走った。あまりに痛みに、彼の意識は白く飛んだ。

藤堂は頭を打った衝撃で意識を取り戻した。目の前は真っ暗だったが、身体は反射的に飛び起きた。ふらつく身体に活を入れ、両腕で頭部を守った。

感じた。

膝を落とす。風が耳を切り裂いた。右の側頭部が痺れた。

「お」

若い男の声がした。はじめて、声を聞いた。今の今まで、男は一言

も発していなかったのだ。
藤堂は右膝を軸にして、半回転した。左足を後ろに蹴り、身体ごとぶつかった。腕を突き出した。掌底だ。あたった。しかし、ずらされていた。
立ち上がった。さらに追い打ちをかけようとしたとき、今度は顎の先が痺れた。脳が揺れ、膝と腰が砕けた。
耐えられない。
晴れかけた視界が、また塗り潰された。
最後に見たのは、弧を描いて閉じた男の脚だった。

三笠は大きく息を吐いた。まだ、うっすらと閃光弾の耳鳴りが残っている。耳抜きをしてもあまり変わらなかった。
彼は倒れた男の目出し帽を剥ぎ取った。三十代半ばの顔が現れる。
「藤堂さんか」
噂には聞いていたが、格闘の心得はかなりあった。視界の悪い状況だったために、終始有利に運べたが、道場で正々堂々と向かいあったらどうなるかわからなかった。
三笠は藤堂の目出し帽を被った。手袋も奪う。
「楽しかったよ」
ＳＩＴの実力を知ることが目的だった。わざわざ立てこもり事案を起こしたのも、どのくらいの時間で対応できるか見定めるためだった。想像よりも遙かに早かった。そして、突入への決断が極めて短時間だった。
人質の男が襲いかかってくるのは予想外だった。多少焦りはしたが、そのほうがかえってよかったかもしれない。時間をかければかけるほど、逃げ場はなくなるのだ。警察の態勢が整う前に、実力を計ることができてよかった。
これほど優秀な組織であるＳＩＴの隊員になりたい。父親の影響もあるが、今日の出来事でその意思がさらに強くなった。
今回は練習だ。次は立場を変えて、経験したい。

三笠は素早くベランダに出て、ザイルを握った。手袋をはめた手だけで、躊躇なく外へと飛び出していた。目も眩むような速さで降下を終え、走り去った。
マンションの上でサポートをしていた隊員が彼の姿を見つけたが、無線の情報によって捜索を開始したとき、すでに消え失せていた。

エピローグ

「昨日、墨田署管内で立てこもりがあったそうですね」
先輩の声が待機所から聞こえた。
「捜一の特殊犯が出動したんだってな」
年配の上司がお茶を啜りながら言った。
「犯人は取り逃がしてしまったとか」
「そうみたいだな。男一人って話だが、緊配(きんぱい)にも引っかからないとなると、まだこの辺に潜伏しているかもな」
せんべいを噛る音がした。
「そうですね。警戒しましょう」
「おい、三笠。怪しいヤツがいたら、職質しとけ」
「わかりました！」
交番の前で行き交う人々を見守りながら、三笠善嗣は背筋を伸ばして返事をした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5487q/

Ｐ

2011年2月13日18時16分発行